

ターニングポイント

2号車—B班 広島市立大学 上村晴

今回、日本の大学生代表として中国に派遣されたということは、私にとって人生のターニングポイントになりました。

日本と中国のハーフとして生まれ育った私は、幼少のころから日本と中国の関係の悪化や国民間の互いに抱くマイナスの印象や感情によって起きる差別問題について興味関心を持ち、且つ身近に感じてきました。家族を含め、周りで生きている中国人が他の人とは含め違う対応をされるのを見て、なぜ同じ人間同士、ましてや隣国で生きる仲間なのにそんなひどいことをするのだろうかという怒りと悲しみの感情でたくさんでした。

小学生の社会の授業を受けているとき、「南京大虐殺」という文字が教科書に書かれていることを発見し、どのように授業で教えられるかととてもワクワクしたことを今でも覚えています。なぜかという、私は母から南京大虐殺の話を書くことが多くあったためです。母は中国人として必ず覚えてほしいこととして、南京大虐殺の話を何度も私に話したことがありました。その度に私は、話を聞くことが辛いのはもちろん、なぜ日本ではこういう事実をあまり話さないのだろうかという疑問を抱いていました。教科書で「南京大虐殺」の文字を見て、ようやくそのことを話せることができると嬉しくなったのもつかの間、実際に授業になると、南京大虐殺のことは一つも触れず、テストに出てくるかもしれないから覚えておくようにと言われて終わりました。私はすごく大きなダメージを受けました。南京大虐殺という事実、しっかりと日本人として勉強しなければいけないことなのに、授業で深掘りされるどころか取り上げられずしなかったことに大きなショックを感じました。その時始めて、日本と中国の関係が悪くなっていくことに納得ができました。国民間で歴史の認識に差異があるようであれば、当たり前だと。そしてこの差異が少しでも少なくなる限り、もう既にできてしまっている国民同士での深い溝は決して埋まることはないだろうと。そして歴史問題と同時に、日本と中国では文化の違いも色濃くあることに気が付き始めました。中国では、初対面は少し冷たく感じるかもしれないが、仲が深まると必要以上にお世話をしてくれたり、思っていることや感じていることを言動できちんと表す人が多いように思います。声の大きさやご飯の食べ方、ルールやマナーなど、日本と真逆と言っても過言ではないでしょう。その文化の違いを理解せずに軽蔑をし、SNSで批判をしたりデマをでっち上げて拡散をするなど差別に繋がってしまう問題が多くなってしまっていることが現状です。最近では何が本当か嘘かわからない情報がSNSで炸裂していて、きちんとネットリテラシーを持ち、情報を鵜呑みしない体制がすごく重要となってきました。これらを踏まえ、私は日本と中国の歴史観と文化観の違いを知るべく中国に行きたいという気持ちが強くなりました。実際に中国に行ってみて、やはり私は実際にその場所に行って自分の五感で物事を感じる重要さを改めて理解しました。それは、実際に来て自分の五感で体験することでしかわからないことがあるからです。たった一週間という短い期間でしたが、私は中国の良いところに

たくさん触れられました。そして、中国人がなぜ日本であれほど忌み嫌われてしまうのか理由もわかりました。それが先ほど述べた文化の違いです。また、4日目に訪れた中国共産党歴史展覧会で、中国側が認識している歴史観を知れて、更に日本と中国の溝が埋まってしまうことに納得しました。どうしても日本の若者が中国に来て何を感じたのか知りたくて、15人ほどに中国に来てみてどうかと質問した結果、皆中国の印象が良いように変わったという風に返答してくれたため、私は正直驚きましたが、喜びもすごくありました。やはりネットやニュースで報じられていることは鵜呑みすべきではないし、信じてはいけないのだと理解できたと言っている人が多く、これが「五感で感じる」ということがもたらした結果なのだろうと思いました。日中ハーフであるため、元々中国に悪い印象はありませんでしたが、今回の訪中で中国が好きになりました。隣国隣人として、また日中ハーフとして、まずは日中の文化の違いを理解してもらうためSNSや身近にいる人たちに言葉で伝えていく活動や、日本人と中国人で関わり合えるようなコミュニティを作り、日中の架け橋となれるよう精進します。

国境の前に心の壁を超えること

2-B 班 桜美林大学 大竹萌日

今回、訪中団として中国を再び訪れる機会を得られたことに、まず感謝したい。私はこれまでにすでに一度、半年間中国で留学していた経験がある。その際は、現地の大学で授業を受け、同世代の中国人学生たちと日々を過ごし、食事や旅行などを通じて多くの交流を重ねた。そうした中で、自分の中にあった無意識の偏見や固定観念——たとえば「中国人はこういう人たちだ」という先入観のようなもの——は、すでにほとんど消えていた。

そのため、今回の訪中団に参加するにあたって、「新しい発見をしたい」とか、「中国に対する印象が変わるのではないか」といった期待は、正直あまり持っていなかった。そして実際に、今回の訪問では、前回の留學生活とは異なり、現地の人々と深く関わる機会はほとんどなかった。日程は非常にタイトであり、訪問先も政府機関や企業、大学と限られていたため、現地の一般の人々とじっくり話をするような時間はほぼなかった。そのため、今回の滞在だけで「中国人とはこういう人たちだ」と語ることは適切ではないし、語る資格もないと感じている。

私の中ではすでに、「中国人だからこう」「日本人だからこう」といった国籍に基づく判断の仕方そのものが意味を持たないものとなっている。これからもおそらく中国に行く機会は何度もあると思うが、だからといって「中国人との関わり方」を特別に意識するつもりはない。むしろ、どこの国の人であっても、どんな背景を持っていても、「一人の人間として敬意を持って接する」——それが、私にとっての当たり前であり、これからも変わらない姿勢だと思っている。

その一方で、今回の訪中団で得た学びは、別のところにあった。今回一緒に行動したのは、全国のさまざまな大学から集まった日本人の大学生たちで、私にとっては全員が初対面の相手だった。現地の人々との交流は少なかったが、だからこそ、日本の学生同士の交流の中で「人と関わるとはどういうことか」ということについて、改めて考えさせられる時間となった。

訪中団という性質上、朝から晩まで団体で行動し、食事も移動も見学も全てが共同作業となる。その中で自然と会話が生まれ、時に深い話をするようになった。最初こそお互いに探り探りだったが、同じ空間と体験を共有する中で、気づけばごく自然に関係が築かれていた。お互い日本人で、しかも大学生という共通点があるのだから、よく考えれば当たり前のことかもしれない。けれども、実際に話しかけてみて、普通に会話が返ってくるという経験の積み重ねは、私にとって非常に新鮮だった。

人と人との関係は、結局のところ「話しかけること」から始まる。そこに国籍も文化も必要ない。話しかければ、返ってくる。関心を持てば、相手もこちらに関心を持ってくれる。自分から一步を踏み出せば、関係は自然と開かれていく。そうしたごく当たり前のことを、今回の訪中団の 7 日間で再確認することができた。今回出会った仲間たちの中には、今後も

交流を続けていきたいと思えるような関係性を築けた人たちもいる。

この経験を通して改めて感じたのは、「人は人である」という、ある意味では当たり前で、しかし現実にはなかなか徹底できていない考え方の重要性だ。相手がどこの国出身か、どんな歴史を背負っているかではなく、目の前のその人自身がどんな人間かを見るべきだと思う。国や歴史のフィルターを通して人を判断するのではなく、一人の人間としてフラットに接すること。それが、異なる文化や背景を持つ人々と関わる上で最も大切な姿勢だと、改めて実感した。

今回の訪中団は、現地の人との接点こそ少なかったものの、人との関わりにおける本質的な部分を見つめ直す貴重な機会となった。中国という国を通じてではなく、他大学の日本人学生たちとの関わりの中で、「人との距離の縮め方」「信頼関係の築き方」といった普遍的な学びを得られたことは、私にとって何よりの成果だった。

今後も、国を問わず、多くの人と関わる機会があると思う。そのたびに、今回の訪中団で得た「人は人である」というシンプルな気づきを大切にしながら、一人ひとりと誠実に向き合っていきたい。

「先入観を越えて ― 7 日間の訪中で得たもの」

2-B 埼玉大学 大羽賀友和

私は今回の訪中団が初めての海外渡航で不安な部分もありましたが、旅行として中国を訪れるのとは違う貴重な体験をすることができました。私の訪中以前の中国の印象は、可もなく不可もなくという感じでした。大学で中国人の友達ができたということや中国のサブカルチャーが好きなどのプラスの面、ニュースなどで報道されるマナーが悪い中国人のイメージなどのマイナス面がありました。プラスとマイナスの両面が混在する中で、「自分の目で本当の中国を見てみたい」、その一心で中国を訪問しました。まず、私の先入観を良い意味で裏切ったのは、現地で出会った人々の温かさでした。正直なところ、渡航前は「マナーが悪い人に会うかもしれない」という不安が少しありました。しかし、7 日間の滞在中に私がそのように感じた瞬間は一度もありませんでした。むしろ、乗り合わせたエレベーターで気さくに話しかけてくれる方がいるなど、中国の人々の飾らない温かさに触れる瞬間が多かったです。その中でも印象的なのが、私が店員さんにおすすめのお土産について尋ねたところ、店員さんが翻訳機や身振り手振りを使って一生懸命に伝えようとしてくれたことです。その姿を見て、人の温かさには国境はないのだと身をもって実感しました。次に衝撃を受けたのは、社会の隅々まで浸透したテクノロジーの力です。特にキャッシュレス化の進展には目を見張るものがありました。都市部の店舗だけでなく、路上で飴を売っていたおじいさんまでが、首から QR コード決済のパネルを下げていた光景は私の想像を遥かに超えていました。残念ながら予定されていた Huawei への訪問は叶いませんでしたが、代わりに訪れた中国の先端液晶企業の技術力と、それらの最新技術がすでに教育現場で活用されているという事実、中国の発展のスピードと将来の可能性を感じずにはいられませんでした。今回の訪問を通して、私が最も学んだことは、私たち訪中団が担う役割の意義です。当初は「私たち学生が数日間交流するだけで、本当に日中友好の役に立つのか」という疑問が心のどこかにありました。しかし、その不安は旅の終わりには払拭されていました。なぜなら、今回の訪中を通して私は中国に好感を持つようになり、他の日本人にも中国の魅力について伝えたいと思うようになったからです。確かに、国家間の関係は複雑な側面を持つかもしれないです。しかし、その礎を築くのは、私たち一人ひとりの相互理解と、個人的な信頼関係に他なりません。個人と個人の繋がりこそが、国と国の友好を育む最も確かな一歩なのだと、身をもって知ることができました。これまで述べてきたように、この 7 日間の旅は私に多くの気づきを与えてくれました。最も大きな収穫は、先入観を捨てて自らの足で訪れ、自分の目で見ることの重要性を学んだことです。これは中国に限らず、世界中のどの国や文化に接する上でも、私が持ち続けたい姿勢だと感じました。今回の訪問では、言葉の壁がもどかしく感じる場面も多々ありました。次にも訪れる機会があるならば、もっと多くの人と自分の言葉で心を通わせ、この国の魅力をさらに深く味わいたいです。その日のために、これから中国語の学習に励みたいと思います。最後になりますが、私の価値観を大きく変え

るきっかけを与えてくれたこの訪中国という貴重な機会と、関わってくださったすべての方々に、心からの感謝を伝えたいです。そして、初めての海外渡航先が中国であり、一旅行者としてではなく訪中国の一員として訪問できたことを大変うれしく思います。

『自分の目で学んだ真実 ～訪中国活動報告書～』

2-B 大阪大学大学院 岡本翼

・訪中国活動を終えて

今回の中国訪問は、私にとって単なる海外研修を超えた、人生観を大きく変える貴重な体験となった。異文化に触れ、多様な価値観に出会い、そして日中両国の未来について深く考える機会を得ることができた。今回の貴重な経験を四節に分けて記した。以下に述べる。

【国際的視野の拡大と平和への責任】

今回の旅で最も印象深かったのは、北京大学で開催された全世界の青少年が集う式典への参加である。そこで習近平国家主席からの祝辞をいただいたことは、まさに衝撃的な体験だった。一学生の参加する式典に国家の最高指導者からお言葉をいただけるということは、中国政府がこの国際交流事業をいかに重要視しているかを物語っている。この瞬間、私は自分が単なる参加者ではなく、日中友好、さらには世界平和の架け橋となる責任を背負った存在であることを強く実感した。

式典では各国の青少年による文化パフォーマンスを目の当たりにし、深い感動を覚えた。踊り、音楽、演劇を通じて表現される各国の文化は、言葉の壁を越えて私の心に響いた。その瞬間、文化に国境はないのだと確信した。そして、世界平和の実現には、日中二国間の関係改善だけでは不十分であり、アジア諸国全体、さらには世界各国との連鎖的な友好関係の構築が不可欠であることを理解した。私たち若い世代が果たすべき役割は、自国の文化を大切にしながらも、他国の文化の継承者としての責任も担い、継続的な平和構築活動に参加することなのだと深く感じた。

【技術革新への驚きと学び】

技術面では、当初期待していた HUAWEI 訪問が実現せず、中国の最先端技術を直接体験する機会は限られていた。しかし、滞在したホテルや街中で目にした AI ロボットの普及状況には目を見張るものがあった。日本と比較して、サービス業でのロボット導入が格段に進んでおり、まだ動作に改善の余地はあるものの、その積極的な導入姿勢は印象的だった。

どのホテルでもロボットによるサービスを見ることができたことから、これは個別企業の判断ではなく、国家政策として推進されていることが伺える。おそらく義務化や補助金制度により、ロボット導入が促進されているのだろう。この技術と経済を結びつけた長期的な国家発展戦略は、日本も学ぶべき重要な取り組みだと感じた。技術革新を単なる効率化の手段としてではなく、国家競争力向上の基盤として位置づける中国の戦略的思考に感銘を受けた。

【文化的理解の深化と課題への気づき】

文化面で最も印象的だったのは、毎日の食事で体験した円卓文化である。大きな円卓を囲み、料理を分け合いながら会話を楽しむという中国の伝統的な食事スタイルは、日本の個人主義的な食事文化とは大きく異なっていた。この円卓という仕組みが、家族や友人との絆を深め、コミュニティの結束を強める重要な役割を果たしていることを実感した。一方で、皮肉なことに、この密接な接触を伴う文化がコロナウイルス感染拡大の一因となった可能性も考えられ、文化と現代社会の課題との複雑な関係について深く考えさせられた。

また、現地での言語体験も貴重な学びとなった。英語でコミュニケーションを図ろうとしたところ、まったく通じない場面が多々あった。これは中国において、世界標準言語とされる英語が一般市民の日常生活にはまだ十分に普及していないことを示している。しかし、この状況こそが、私たち日本の学生にとって重要な役割を果たす機会だと感じた。東京外国語大学の学生との交流を通じて痛感したのは、私たちが中国語を学び、中国文化を理解することで、真の相互理解の架け橋となれるということである。言語の壁があるからこそ、こちらから歩み寄る姿勢が重要であり、それが両国の未来を担う若者としての使命なのだと確信した。

【未来への責任と決意】

この訪中研修を通じて、私は日中友好の未来を担う一員としての責任の重さを深く感じている。両国間には歴史的な問題や政治的な課題が存在するが、それらを乗り越えて真の友好関係を築いていくことが、私たち若い世代に課せられた使命である。文化交流、技術協力、そして人と人との心の交流を通じて、両国の絆をより一層深めていきたい。

今回の経験は、私にとって単なる思い出ではなく、これからの人生の指針となる貴重な財産となった。世界平和への貢献、異文化理解の促進、そして日中友好の発展に向けて、継続的に努力していく決意を新たにしている。

最後に、このような貴重な機会を提供してくださった中国政府および関係者の皆様、そして公益社団法人日中友好協会の随行員の皆様に心から感謝申し上げます。皆様のご支援とご配慮により、私は人生を変える素晴らしい体験をすることができました。この経験を胸に、日中両国の明るい未来の実現に向けて、微力ながらも貢献していくことをお約束します。本当にありがとうございました。

「中国の国、人について考えたこと」

2-B 静岡大学 加藤亜実咲

私は、将来教科書だけでは学べない知識や経験を話せる教師になりたいです。今回の訪中も、いつか中国での経験を話し子どもたちが中国に興味を持つきっかけを作りたい考え行くことを決めました。しかし実際に中国へ行ってきた今、俄然中国に興味を持ったのはむしろ私の方であり、まだまだ私は子どもたちに話せる段階にいないのではと思ったほどです。訪中国として行かせて頂いたからこそ訪れた施設や大学、企業などはどれも私が想像していた以上の規模であり、中国の底知れない歴史や文化、社会の発展を感じさせられました。

また、一週間を通して日本と中国の過去の戦争についても考えさせられました。日本では、数ある戦争の内の1つでそれらを取り上げますが、中国にとって、日本との戦争はもっと私たちが想像もできないくらい、意味が含むもののように感じました。4日目に訪れた中国共産党歴史展示館では、大きく抗日戦争のコーナーが作られており当時の写真や抗日運動についての説明がされていました。正直、私が思っていた以上にそのような展示は多く、はっきりとした抗日の説明文に仕方がないとわかっていつつもショックを受けることがありました。様々な国から学生が集まった世界青年友好交流大会でも、何度か抗日戦争、という言葉が出されその度にはっとし真意を知りたいと考えました。しかし私は日本と中国との戦争について、日本で使われる教科書の情報しか知りません。これらの戦争についての中国側の主張や捉え方、そして歴史の流れとより詳しい戦争の内容を勉強したいと思いました。中国側と日本側で比較してみたら、今回私が持った疑問も少しは解決の糸口が見えるのではないかと思います。

更に私が考えたのは、実際に中国に住む人々のことです。私は以前マレーシアで中華系の家族のお宅でホームステイをしたことがあり、その時から中国の方は面倒見が良く、家族の繋がりをとても大切にしている人々であるという印象を抱いていました。今回出会った中国の方々も、言葉は違えど丁寧に教えてくれようとする店員さんなど、出会う人の多くが優しく私たちを歓迎してくれ改めて中国の方の温かさを感じました。このような、その国に住む人々の人となりは日本にいて情報を得るだけではわからないもので、実際に訪れることの価値であると思います。この経験によって、今後たとえ中国のネガティブな情報を目にしたとしても私はその一面だけで中国の印象を変えることはないですし、むしろその情報の多角的な視点を知りたいと考えます。日本に入ってくるような中国の国についての情報と、実際に生活している中国人の方と一緒にして考えないこと、これを私が再認識したと同時に、将来教壇に立つとき子どもたちにも伝えていきたいことです。

最後に、度重なる旅程の変更に対応し100人もの私たちを最後まで率いてくださった中国日本友好協会や日中友好協会の方々、現地で一緒に行動してくださった通訳やスタッフの方々、1週間をともにした仲間に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

『中国で印象的だったこと』

2号車－B班 津田塾大学 木村静花

今回の訪中で印象的だったことは技術や建物のスケールの大きさと、中国の人々の価値観、そして歴史の捉え方です。

技術や建物は日本と大きく異なると感じました。今回、CVTE というテレビやタブレット、モニターなどの家電を販売している企業を訪問しました。その製品には、会社で行われる会議を録音して、議事録を書いてくれる技術や、学校で子どもたちの成績や出席状況、行動範囲を一括で管理するシステムなどがありました。特に印象的だったのは、地域ごとの教育格差を是正するために、優秀な学校の授業を録音し、そのデータを全国に共有する仕組みです。その仕組みを日本でもこの仕組みを導入し地域格差の是正に繋げるべきではないかと考えました。中国ではすでにこの仕組みが導入されていますが、日本は出席管理や授業の時間割やポスターが紙で、タブレットやモニターの整備が自治体によってバラバラであるのが現状です。教師もタブレットやパソコンなどの端末の扱いに慣れていない人が多く、日本は遅れていると感じました。建物は土地が広いことや天井が日本と比べて高いことに驚きました。特に中国共産党歴史展示館は、とても広くたった3年で工事が終わったと思えないほど立派な建物でした。その建物は展示だけではなく、歴史を学ぶことができるアトラクションのような映像施設も含まれており、その技術力と迫力に驚きました。しかし、そのような施設以外のマンションなどは日本にはない独特な形をしていて、たくさんの人々が住めるように一部屋が小さくなっていたのは興味深かったです。中国共産党歴史展示館のような国に大きく関わる施設は広く立派でしたが、中国の人々が住むような建物は狭い印象があり、その格差が目に見えて分かりました。

私は中国の人々の価値観にも触れることができました。中国は外国人の受け入れに柔軟であるという印象をより強く受けました。以前新聞で中国のことについて調べていた際、中国はアジアやアフリカなどの国々と外交を広げていて、ビジネスや技術協力を行っていることを学びました。今回の訪中でも、アジアやアフリカの国々との連携を強めようとする意思を感じました。例えば世界青年友好交流大会では、日本だけではなくアフリカや東南アジアの国々など様々な国が中国を訪問していることに驚きました。また、中国への留学を公費で行くことができ、その取り組みが昔から今まで継続的に行われていることも驚きました。アメリカや日本、イギリスなどでは移民や外国人を追い出すような政策や排斥運動の動きが出てきていますが、中国では外国人を積極的に受け入れる姿勢があり、それが経済発展につながっているのではないかと推測しました。北京外国語大学で中国の大学生と交流した時に、中国の人々は日本人と価値観が異なると感じました。特に中国の方は現実的な夢を持つ傾向があるが日本人は現実的な夢と非現実的な夢の両方を持つ傾向があるという事実はとても興味深かったです。中国の方が現実的な夢を持つことの背景に、何に関係しているのだろうかという疑問に思いました。

歴史の捉え方は日本と異なると感じました。世界青年友好交流大会は平和がテーマとなっていたため戦争の歴史についての言及がありました。その際に必ず言っていたのは抗日対戦の勝利、反ファシズムの勝利というキーワードでした。中国の人にとって、第二次世界大戦は日本に勝利したという歴史だと分かりました。日本は原爆や空襲などの被害を受けた側だけではなく、被害を与えた側でもあるということを忘れてはならないと感じました。ただ世界青年友好交流大会でも繰り返されていたように、日本も中国も世界に平和が訪れることを望み、習近平国家主席からのメッセージからもそのように読み取ることができました。また、中国の方は長い今までの歴史を誇りに思っていて、その歴史の中で生まれた文化をととても大切にしていることが分かりました。廊坊師範学院や、シルクロード国際文化交流センターでは様々な文化を現在でも受け継ごうとしていることや、それを守ろうと様々な形で紹介していることが印象的でした。自国の文化や歴史を誇りに思っていて、その文化を来世に繋げる取り組みを学びました。歴史を学び、文化を残そうとする気持ちは日本と変わらないと感じました。

「絶対的な価値観」

2 - B 法政大学 倉本麻生

河北省と北京で過ごした七日間の中国訪問は、日本、そして私自身の未来のあり方について深く考えさせる貴重な機会となった。訪中前、私は中国に対して漠然とした経済大国としてのイメージと、報道から受ける政治的な硬さを感じていた。しかし、この一週間で得た経験は、それ以上に色濃くそのイメージを塗り替えるものであった。

特に印象的だったのは、企業訪問で目にした全校生徒の情報を一枚で管理できる液晶・技術の進化だ。中国がこれほどまでに高度な技術力を持ち、それを急速に発展させている現実直面し、日本の技術が世界をリードしていた時代が過去になりつつあることを痛感した。同時に、中国全土を支配することが世界を支配することと規模において似ているという中国の持つ影響力の大きさを改めて認識した。その巨大な国内需要と生産力は、一つの世界を形成しているようだった。

企業訪問後、訪中団に参加した学生と対話をする機会があり、日中だけでなく米中間の対立の現状について双方が同じ技術発展に多大な時間と資源を費やしていることを知った。彼らが協力し合えば人類全体の進歩はどれほど加速するだろうかと想像せずにはいられなく、叶わない現状を悔しく思う。そしてこの対立を解消していくためには、日本の協力が不可欠であると強く感じる。技術協力場を提供し、共通の地球規模の課題解決に貢献することで、緊張緩和に寄与できるはずだ。だからこそ日本は、両国の間に立ち、建設的な対話と相互理解を促進する役割を果たすべきだと考える。

また、今回の訪問から日本の社会が持つある特徴についても深く考えるようになった。それは、自国や他国に対して愛国心や強い思想を持つことが、時に「特定の思想の持ち主」というスティグマとして捉えられてしまう傾向がある点だ。例えば、アメリカでは星条旗を家の前に掲げることはごく自然な愛国心の表れだが、日本では日の丸を掲げている人を見ると、特定の政党を支持している、あるいは特定の政治的意図があるといった偏見が生まれるかもしれない。日本では特定の政党を支持する意見が公に多く見られないのも、私が「中国が好きだ」と大きい声で言うことに躊躇してしまった理由と繋がっていると推測する。そしてあたかも政治的な意思によって個人の意思も左右されているかのように感じる。例えば、日本に親米感情を持つ人が多いのも、日本政府の政策に少なからず影響されているとしたら、この状況は個々人が本当に感じていることや考えていることを自由に表現することを妨げているのではないか。

こうした日本の現状を鑑みると、人々の意識を変えるためには、行動を起こす必要があると考えるようになった。私は SNS などを通じて、中国の歴史や文化、そして私が実際に触れて感銘を受けた技術力や人々の温かさといった、中国の良さを広めていく活動をしてい

きたい。そうすることで、中国に対して友好的ではない人の思想を少しでも変えることができるかもしれない。それは決して大きな力ではないかもしれないが、一人ひとりの意識の変化が積み重なることで、日中友好、ひいては世界の平和につながる第一歩となるはずだ。

この七日間を通して、私は政治や社会の動向に左右されず、自分自身の内なる声に基づいた「絶対的な価値観」を持つことの重要性を痛感した。それは、特定の国や政治体制に対する盲目的な支持ではなく、普遍的な人間性、相互理解、平和への希求といった、より高次の価値観である。

隣国であり隣人である中国と、日本は今後どのように付き合っていくべきか。それは、表面的な友好関係を築くだけでなく、歴史や文化、そして現代の課題を深く理解し、互いの違いを尊重しながら共通の未来を創造していくことだと思う。私自身も、政治的な思惑や世論に流されることなく、一人の人間として隣人としての中国と向き合い、対話し、理解を深めていく努力を続けていきたいと強く思う。この訪中は、私にとって単なる旅行ではなく、自身と日中関係、そして世界のあり方を見つめ直す貴重な機会を与えてくれた。

肌で感じたリアルな中国

2号車-B班 笹島 真樹

中国への旅が変えた固定観念

私は先日、7日間にわたる日中友好大学生訪中国に参加し、北京を訪れた。この旅は、私の中にあった中国に対する漠然としたイメージを大きく揺さぶり、新たな視点を与えてくれた。メディアや断片的な情報から形成された固定観念は、実際に現地の人々と触れ合い、その文化や社会を肌で感じることで、より具体的で多角的な理解へと変わっていった。

訪中前の私にとって、中国は「経済成長が著しい国」「テクノロジーが進化している国」という表面的な知識しかなかった。しかし、北京に降り立ち、まずそのスケールの大きさに圧倒された。広大な国土を持つ首都にふさわしい堂々とした街並みは、歴史と現代が見事に調和していた。特に驚いたのは、そのテクノロジーの発展ぶりだ。モバイル決済の普及率は日本の比ではなく、WeChatやAlibabaといったスーパーアプリが生活のあらゆる場面で利用されていた。企業訪問では、AIが自動で議事録を作成するオンライン会議システムや、巨大な電子ボードを目にし、中国が自国で最先端の技術を開発し、世界に通用する製品を生み出していることに衝撃を受けた。一方で、学校の入退校記録にカメラが使われている様子からは、プライバシー保護に対する考え方の違いも感じた。これらの経験は、教科書やニュースでは決して得られない、リアルな中国の姿だった。

また、今回の旅は、日中両国の歴史や文化のつながりを再認識する機会でもあった。中国共産党歴史展示館を見学した際、日中戦争が「侵略」という言葉で多用されていたのを目にして、自国の歴史教育における加害性の描写の少なさを痛感した。また、毛沢東に対する評価が、日本では「文化大革命を起こした人物」という側面が強いのに対し、中国では「偉大な立役者」として強調されているのを見て、歴史認識の多様性を実感した。同時に、両国が共有する文化の深さにも気づかされた。私たちが日常的に使う「百聞は一見にしかず」や「四面楚歌」といった故事成語が中国に由来していること、お箸を使う食文化や仏教が中国から伝来したことは、両国が長い歴史の中で築き上げてきた深い絆を物語っていた。宿泊先のホテルに写経が置かれていたのを見た時、仏教が単なる文化としてではなく、精神性として今も人々の生活に息づいていることを肌で感じた。

この旅で得られた最も大きな収穫は、中国の人々の温かさに触れられたことだ。中学生時代にスキー場で中国人の方々に助けてもらった経験から、私は中国に対して好意的な印象を持っていたが、今回の訪中を通じてそれが確信へと変わった。天候不良でスケジュールが変更になった際も、中日友好協会の方々や現地のガイドさんが迅速かつ丁寧に対応してくださり、私たち訪中団員一人ひとりを大切に思ってくれていることが伝わってきた。北京外国語大学の学生との交流では、彼らが日本に強い関心を持ち、積極的に日本について学ぼうとしている姿に感銘を受けた。互いに歩み寄ろうとする姿勢こそが、日中友好の基盤となることを改めて実感した。

今回の訪中体験は、私の人生に大きな影響を与えた。中国語での会話に挑戦し、現地の人々

と交流した経験は、私の学びや将来の方向性に大きな影響を与えた。今回の旅で得た経験や学びを、これから多くの人々に伝え、日中間の相互理解を深めるための「架け橋」となることを目指したい。私たちは隣国同士であり、時には意見が分かれることもある。だからこそ、直接会って交流し、互いの文化や価値観を尊重し合うことが何よりも大切だと信じている。この貴重な経験を活かし、これからも日中友好のために貢献していきたい。

「五感で感じた画面の向こうの中国」

2-B 龍谷大学 谷優希乃

今回、日中友好大学生訪中団として中国を訪れ貴重な経験を積むことができました。訪中前、私の中国に対する印象は「温かく親切な人が多い国」というものでした。それは中学生時代、スキー場で中国人の方々が手厚くサポートしてくださった経験から生まれたものでした。その記憶は私の心に強く残り「もっと人々と交流し文化に触れたい」という思いを抱くきっかけとなりました。

実際に訪中してみて、その印象は確信へと変わりました。滞在期間中、天候不良によるスケジュール変更といった予期せぬ事態が何度もありましたが、その度中日友好協会の方々や現地のガイドさんが迅速かつ丁寧に対応してくださいました。限られた時間を最大限活かせるよう予定を組み直し、ホテルや移動手段、訪問先などを調整してくださる姿には訪中団員一人ひとりを大切に思う気持ちを感じることができました。また、訪問先で疑問に思ったことを尋ねると歴史や文化的背景を交えて分かりやすく説明して下さり、その知識の深さと誠実さに深い印象を受けました。

今回の訪中を通して、日本と中国が深く文化的な絆で結ばれていることを実感しました。両国は漢字文化圏の仲間でもあり、「百聞は一見にしかず」「四面楚歌」「塞翁が馬」など、日常会話で使う多くの故事成語は中国に由来していることを学びました。普段何気なく使っていた表現が長い歴史を経て日本にも根付いていること、さらにはお箸を使う食文化や仏教の伝来も中国から伝わっており、宿泊先のホテルの机には写経が置かれていました。手に取ってみると文字や形式だけでなく精神性としての仏教が今も生活に息づいていることを「五感」で感じることができました。

この7日間で感じたことは、中国の人々の温かさだけではなく文化や社会の多様性と奥深さです。都市の活気や技術の発展などこれらは全て教科書やニュースでは感じることはできないリアルな中国の姿でした。現地の交流では日本と共通する価値観もあれば、異なる考え方もあることを実感しましたがその違いはお互いを理解し合うためのきっかけとなるのではないのでしょうか。

訪中前の私は、中国に対して好意的な印象を持ちながらも、その理解は表面的なものでした。しかし、訪中後の今は中国の背景や日常を知ったことでより深く具体的な理解に変わりました。普段の生活環境ではあまり見ることができませんが、北京外国語大学の学生と交流して私自身だけでなく中国の人々も日本に対して関心を持ち、知ろうと努力してくれている姿があることを実感しました。この相互の歩み寄りこそが日中友好の基盤になると考えています。

私たちは隣国同士ではありますが意見が分かれることもあります。だからこそ直接会って交流し共に時間を過ごすことが大切だと思います。今後、日本と中国のお互いの文化や価値観を尊重しながら日常的な人と人との交流を積み重ねるべきであり、その小さな積み重ねが

誤解や偏見を減らし相互理解を深めるベースとなるでしょう。

今回の訪中は、私の人生において大きな意味を持つ出来事でした。中国語での会話に挑戦し、現地の空気を肌で感じ人々と交流した経験は私の学びや将来の方向性に大きな影響を与えました。これからは、今回得た経験や学びを日本にいる友人や同世代の間で中国への理解を広げる活動をしていきたいと考えています。日中友好大学生訪中国の一員として日本と中国をつなぐ架け橋となる人材になることを目指しています。そして、多くの出会いと学びに心から感謝しこの経験を必ずこれからの人生に活かしていきたいです。

ありがとうございました。

「先入観をこえて見えた中国」

2-B 津田塾大学 富田奈古美

大学に入学し、中国ゼミに所属するまでは、中国に対して多くの偏ったイメージを抱いていた。報道などを通じて耳にするのは、政治的な緊張やマナーに関する否定的な話題が中心であり、その影響から、中国は価値観を共有しにくい国だという先入観を無意識のうちに形成していた。とりわけ、中国人の性格や公共空間での振る舞いに関して、実際に触れた経験もないまま、一方的な印象を持っていたことに、今では違和感を覚える。

しかし、今回の訪中を通じて、そうした見方は大きく揺らいだ。中国の急速な経済発展や IT 技術、デリバリー文化、キャッシュレス社会の進展については、これまでも断片的に知ってはいたが、現地に足を運び、生活の中にそれらが自然に組み込まれている様子を目の当たりにし、予想以上の現実に圧倒された。都市のインフラ整備やオンラインサービスの浸透、QR コード決済の利便性など、日本のそれを超えていると感じさせられる場面も多かった。かつては東アジアの中で日本が最も進んでいるという感覚を持っていたが、今ではその中心は中国へと移りつつあるのではないかという印象を強く受けた。

とはいえ、現地で過ごす中で、急速な発展の背後にある課題にも直面した。たとえば、都市中心部であっても和式トイレが残されていたり、幹線道路を少し離れると、整備の行き届いていない道や老朽化した建築が見られたりと、先端的な都市機能と伝統的な生活空間が共存している。このような「新しさ」と「古さ」の同居こそが、現在の中国の姿であり、その未完成でありながら前進を続けるエネルギーが印象的であった。

また、現地での人々との交流を通じて強く印象に残ったのは、「内と外」を明確に区別する中国独自の文化である。一度内側に受け入れられると、まるで家族のように親密で情熱的なもてなしを受ける。SNS を通じてつながった中国の学生たちは、帰国後も積極的に連絡をくれ、その関係性の深さに驚かされた。一方で、建物やイベントなどの外見はきらびやかであっても、内部は簡素であることも少なくなく、見栄や体裁を重視する文化的傾向も垣間見えた。こうした外面と内面のギャップもまた、今の中国社会の特徴のひとつであり、発展中のダイナミズムの一部として受け取った。

歴史認識の違いについても、大きな示唆を得た。世界青年友好交流大会のスピーチや中国共産党歴史展示館での見学を通じて、中国が重視する戦争被害の記憶と、日本国内で語られる歴史認識との間に大きな隔たりがあることを実感した。学校教育の中で触れてこなかった史実や、異なる視点から語られる歴史に触れる中で、歴史とは常に語り手の立場や政治的背景に依存するものであることを改めて認識した。アメリカの教育において、原爆投下についてほとんど教えられていないという例と同様に、歴史観は一国の文化や政治と密接に結びついている。中国で「五千年の文明史」と表現される歴史が、日本では「四千年の歴史」と語られるように、同じ過去を指しながらも、そこに込められる意味合いや誇りは大きく異なっている。

この訪中を通じて最も強く感じたのは、異文化理解とは、相手の立場や考え方をそのまま受け入れることなく、それがどのように形成されてきたのかを理解し、違いを前提として尊重しようとする姿勢にあるということだ。異なる背景を持つ者同士が、同化でも対立でもないかたちで共に在るためには、まず知ろうとすること、そして対話を重ねることが不可欠である。今回のプログラムは、そのような姿勢の出発点として、自分にとって非常に意義のある経験となった。

何より、かつて偏見を抱いていた自分が、今では中国という国に対してもっと知りたい、もっと関わりたいと思っていること自体が、大きな変化である。現地での出会いや交流を通じて触れた、人々の温かさや誠実さ、そして多様で柔軟な価値観は、これからの学びにおいても大切にしていきたい。もちろん、日中間には今後も多くの課題が残るだろうが、だからこそ草の根の交流を通じた相互理解の積み重ねが、未来の関係構築の鍵となるはずである。最後に、このような貴重な機会を与えてくださった日中友好協会の皆様、中国側関係者の皆様に、心より感謝申し上げる。

「隣国の実像に触れて」

2号車B班 関西学院大学 中西 麻緒

国と国とが真に理解し合うためには、どれだけ多くの対話や交流の機会が必要なのだろうか。訪中前の私にとって、中国という国は、情報に溢れているにもかかわらず「よく知らない国」だった。政治的立場やメディアの論調が影響してか、「距離の近さ」と「心の距離」が比例していないことを実感する場面が多々あった。しかし今回、7日間にわたる訪中国の一員として現地を訪れたことで、「自分の目で見る」「自分の声で問いかける」ことの圧倒的な意味を思い知らされた。

訪中プログラムの中で、私たちは北京大学で開催された世界青年平和大会に参加した。約3,000人の青年が集まった会場では、各国代表のスピーチに続き、文化芸術のパフォーマンスが披露され、会場全体が多様性のうねりに包まれた。そこにあったのは、国籍や言語を超えて共通する「平和を願う心」であり、私はこの瞬間に、国家間の対立が報じられる時代であっても、個人と個人の間には“共鳴の可能性”があると実感した。その後のスケジュールでは、廊坊師範学院の訪問をはじめとする教育・文化施設の見学が続いた。特に、伝統工芸の展示や紅樓夢の体験型演劇は、単なる観光では得られない「文化に触れるという知的行為」であった。こうした体験を通して、私は中国がいかに自身の伝統文化を現代技術と融合させながら、国内外に発信しているかを学んだ。また、北京外国語大学の学生との交流では、互いの国の文化、言葉、食について意見を交わす中で、政治を超えた「人と人の関心と敬意」が通い合う場面が多くあり、互いの文化を尊重し合う姿勢こそが、友好の出発点であると私に教えてくれた。

企業視察では、CVTEの最先端技術に触れた。技術展示の中には、私たちの教育現場でも活用可能な応用技術が数多くあり、ICT分野における中国のスピード感と社会実装力には目を見張るものがあった。また、国家大劇院などの文化インフラを訪れた際には、都市開発と文化政策の両立が意識されていることが随所に見られ、中国が「ハードの整備」に留まらず、「文化の基盤としての建築」にも戦略的投資をしていることを理解した。日本では文化施設の整備が往々にして採算性や建政コストの議論に埋もれがちだが、中国の取り組みからは「文化を守ることは、国家を未来へ繋ぐ投資である」というメッセージが感じ取れた。

そして最終日、天壇公園を訪れたことで、「文化のかたち」と「精神のかたち」が重なる空間に身を置くことができた。本来予定されていた万里の長城には、豪雨の影響で訪れることが叶わなかったが、この変更が却って意味のある学びとなった。天壇は、天を祀るという行為の中に、宇宙観や自然観が息づいており、中国の思想と信仰の歴史を建築というメディアを通じて学ぶことができた。観光地として見るのではなく、そこに込められた「時間と祈りの積層」に触れることで、中国の“かたちにならない深層”に近づいたような感覚を覚えた。

この7日間を通じて、私は「知ること」の力を改めて痛感した。SNSやメディアを通じた知識も大切だが、現地での経験や現地の人との対話には、それをはるかに超えるリアリティ

がある。例えば、「中国は閉鎖的である」という先入観を持っていた私にとって、外国人の私たちを温かく迎え、文化を惜しみなく共有してくれた現地の人々や学生とのふれあいは、その認識を大きく変えるものだった。また、この旅のなかで感じたのは「日本人としての自分」に対する問いである。隣国とどう向き合うかは、個人レベルでも社会レベルでも、これからの日本にとって避けて通れない課題である。中国との対話は、決して「仲良くなる」ことだけを意味しない。互いの違いを正しく知り、その違いを恐れず尊重し合うこと。そのためにもまず、自分が何を知り、何を語れるのかを問い直す必要がある。訪中を経て、私は“国際交流”という言葉や、「語学学習」や「文化体験」の枠に留めず、「共に未来を考えるための手段」としてとらえるようになった。

この経験は、終わりではない。むしろ、ここからが始まりである。私たちは今後、国内外の社会課題に直面していく中で、「国際的な共感と協力」の必要性をますます感じるだろう。今回出会った仲間たち、中国の学生たち、そして現地で感じたあらゆる声と風景を胸に、私はこれからも「他者を理解しようとする姿勢」を行動の中心に置き続けたい。

最後に

訪中国という貴重な機会を提供して下さった中日友好協会の皆様、また現地で支えて下さった随行の方々に、心より感謝申し上げます。この経験を人生の糧とし、未来の選択や行動に還元していくことを、ここに誓います。

「人を知ること」

2号車—B班 奈良県立法隆寺国際高等学校 教諭 西林咲稀

以前、ある事業に参加した縁で推薦をいただき、社会人だが特別に本事業に参加することになった。学生時代から事業の存在は知っていたがさまざまな出来事が重なり応募できずじまいだった。社会人3年目を迎え、変化を求めて行動しても裏目に出してしまうことが続き、自信を無くし自分のやりたいことが前より見えなくなってしまった時に何か糸口になればと参加を決めた。

さて、本事業に参加して学んだことを2点挙げたい。まず1点目は、「自分の目で見ることがいかに大切か」ということだ。昨今、ふと携帯を見れば受動的に情報が流れてきてそのすべてを知った気になってしまうことが少なくないのではないだろうか。訪中前、私は、中国に対して近い国だがどこか心の距離のある国だと感じていた。具体的な何かがあった訳ではないのだが、私自身もそうした情報に流されていた一人なのだと思う。北京外国語大学との交流の際、随行員の方が仰っていた、「相手を知ることとは、その背景をも知ること。」という言葉が今でも印象に残っている。当たり前だが、それぞれに生きてきた背景が、文化が、考え方が異なる。「知る」という言葉の奥深さを感じるとともに、果たして自分はそのように行動できていたのだろうかと問いかけるきっかけになった。国規模の問題はあるにせよ、互いに歩み寄りたいという人たちがいるのもまた事実である。そのことを忘れてはいけないのだと思う。

次に、2点目は「人との繋がりを持つことができた」ということである。本事業で出会った大学生たちは本当に素敵な方ばかりだった。素直で明るく、そして自分の芯を持って行動する強さを持っていた。当初は社会人で参加することに不安がなかったわけではなかった。しかし、彼らは私を受け入れてくれ豊かな考えや発想を提供してくれた。自分の役割を果たそうとした時もあったが、素の自分でいられたのは彼らの持つ穏やかな雰囲気のおかげだと思っている。こうした人たちがきっと前に立って多くのものを背負っていくのだと思う。今回の訪中で、誰も欠けてはいけない団員だった。改めて、感謝を述べたい。

また、彼らの姿をとおしてどこか忘れていた学生時代の高みを目指す姿勢や貪欲に食らいつく姿を思い出すことができた。普段、私は高校生と接する中で「自立させる」ことを指導目標にしている。与えられたことをただ受け入れるだけでなく、何事も疑問を持ち、追究する姿勢を持つことを高校3年間で身に付けて欲しい。卒業後も自分の足で歩いて行ける人になって欲しい。生徒たちが、今回出会った大学生のようになって欲しいと思っている。

おわりに、今後の見通しを記す。まずは本事業での経験を生徒たちに伝えたい。世界は思っていたよりも広くて、そして見えていたと思っていたものは案外ごく一部分にすぎないということ。外の情報に左右されるのではなく、自分の目で、自分の足で見て感じて判断して欲しいということ。人を知ることとは、その人の生き方や人生、そして文化を

受け入れて尊重すること。人との出会いを大切にしたいということ。そうするときっと見える世界は広がり、人生は豊かになるということ。まだまだ未熟だが、それらを語ることでできる教師でありたいと思う。

もう、この訪中団の団員全員が集まることは無いのかもしれない。人生は出会いと別れに溢れていてその取捨選択は自由だ。でも、欲をいえばまた皆に会いたいと思う。もしその時が来たら、今より少しは胸を張った姿で再会したい。皆の今後の人生が豊かになることを心から願っている。

最後に、このような貴重な経験をさせていただいた日中友好協会の皆さま、訪中先でお世話になった皆さま、すべての出会いに感謝申し上げたい。

「訪中を終えての所感文」

2号車—B班 武蔵野大学 早坂良幸

今回、2025年日中友好大学生訪中国第2陣の団員として中国を訪れた経験は、私にとって学びと出会いの連続であった。文化、景色、食、人等、中国を体験する中で、予想を超える発見があり、改めて国際交流の意義を実感する機会となった。

河北省廊坊市では、シルクロード国際文化交流センター（丝绸之路国际文化交流中心）を訪問し、施設の見学とともに「紅樓夢」の演劇を鑑賞した。文化交流センターは、施設の外観が非常に個性的であるとともに、内部には多様な体験型の展示があり、身を持って体験することができ印象的だった。その後に観た「紅樓夢」の舞台では、演出の完成度の高さに驚かされた。演者と観客の距離が非常に近く、視線の交わる距離で繰り広げられる演技は、舞台というよりも体験に近かった。何もなかった床から突然せり出すように登場する舞台、宙を舞う演者たち等、技術と演出の融合が、伝統文学の世界をより鮮やかに、そして現代的に立ち上がらせていた。

北京市内では中央広播電視塔（中央广播电视塔）を訪れ、そこから市内全体を一望することができた。360度に広がる景色を目の当たりにし、そのスケールの大きさに圧倒された。これまで日本国内でもいくつかの展望施設に登ったことはあるが、中国で都市全体を俯瞰するのは初めてであり、市内の建物の配置や都市設計、道路の広さなど、都市づくりの考え方の違いを視覚的に理解できた。広大な土地を活かした合理的な区画、空間の使い方には、日本の都市とは異なるダイナミズムを感じることができた。

施設等の見学だけでなく食事も訪中の大きな楽しみの一つであった。中でも、本場で味わう北京ダックは格別で、皮の香ばしさと肉のジューシーさが絶妙に調和しており、提供の仕方まで含めて本場の味を堪能できた。火鍋では、ラム肉をさっとスープにくぐらせて食べる形式で、日本ではあまり見かけない形状の鍋が用いられており、味覚だけでなく視覚的にも楽しませてくれた。他にもこれまでの人生で口にしたことのない中国料理も多く、本場の中国料理の奥深さと多様性を感じることができた。

また、今回の訪中を通じて、最高の仲間たちとの出会いにも恵まれた。上は社会人の方から、下は大学一年生まで、年齢も背景も異なる団員たちとともに行動する中で、自然と互いを尊重し合う関係が築かれていった。食事や移動、見学を通じてお互いを理解し、帰国後もつながりを持ち続けたいと思えるような仲間に出会えたことは、この訪中国に参加したこと最大の成果の一つであると考えている。北京外国語大学では現地の学生と直接交流し、彼らが日々どのような考えを持って生活し、学んでいるのかを聞くことができた。お互いの学生生活や社会観について語り合う中で、言葉や国を越えた共感を得ることができ交流の意義を強く実感した。

最後に、このような貴重な体験の機会を与えてくださった関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。今回の訪中では、中国国内の悪天候により、当初予定されていた広東省や雄安市

の訪問が中止・変更となるなど、現地での行程調整が必要となる場面も多くあったと考える。そうした中でも、私たち団員が安心して充実した日程を過ごせるよう、調整業務等に携ってくださった引率や随行の方々のご尽力に深く感謝している。派遣に向け業務を行ってくださった日本中国友好協会、招聘してくださった中国人民对外友好協会、及び、中国日本友好協会の皆様のご厚意と支援がなければ、このような深い学びの機会は実現し得なかったと考え、この場を借りて改めて感謝の意を申し上げる。

今回の訪中団で得た経験は、私にとって一生の財産である。目で見、耳で聞き、人と語り合う中で得た実感は、これからの人生においても必ず生きると考え、日中の相互理解と友好の架け橋として、今後もこの経験を大切にしていきたい。

「固定観念から相互理解へ：訪中体験が私に与えた影響」

2号車ーB班 東京大学 森川結衣

私は7日間にわたる訪中団に参加し、北京を深く知る貴重な機会を得た。本報告書では、訪中前後の中国に対する私の心境や考えの変化、今後の日中関係への展望、そしてこの7日間の私自身の人生に与えた影響について考察する。

1. 訪中前後の中国（人）に対する心境・考えの変化

訪中前、私の抱いていた「中国」のイメージは、メディアで報じられる政治経済の動向や、断片的な情報から形成されたものであった。しかし、実際にその地に足を踏み入れたことで、私の漠然とした固定観念は、具体的で多面的な印象へと変化した。

まず、都市のスケールの大きさに圧倒された。北京は広大な国土を持つ首都にふさわしい、堂々とした風格を備えており、経済成長を背景に次々と高層ビルが建てられていく活気を肌で感じた。道路はまっすぐに整備され非常に分かりやすく、古都としての歴史と現代的な都市機能が両立していることに驚いた。文化設備も整っており、紅樓夢を鑑賞した際には、様々な工夫が凝らされた舞台から文化の力も強く感じた。

また、テクノロジーの進化も目覚ましいものがあった。例えば決済では、様々な方法が乱立する日本と違い、WeChatやAlibabaがスーパーアプリを作り決済にも進出して綺麗に整理している部分に、利便性の高さを感じた。CVTEという企業の訪問では、オンライン会議システムに付されたAI自動議事録や、タッチパネルで簡単に図形や文字を操作できる巨大な電子ボードなどが印象的だった。日本が常にアメリカの技術製品を使用している中で、中国が自国で開発し、世界に通用する製品を生み出していることに強い衝撃を受けた。一方で、学生の入退校記録や導線追跡にカメラが用いられている中国の学校の様子には、日本とのプライバシー保護に対する考え方の違いを強く感じた。

歴史に関しては、中国共産党歴史展示館を見学した際に学ぶことが多かった。例えば日中戦争に関する展示では、日本では対等な戦争として描かれているように感じるが、展示館では「侵略」という言葉が多用されていた。確かに日本は侵略していたので、やはり自国の歴史を学ぶ際に加害性はあまり描かれなのだなと感じた。また毛沢東については、文化大革命で数千万人を殺害したという記憶が強い一方で、偉大な立役者として強調されている部分があり、意外な印象を受けた。

一方で、中国の人々との個人的な交流については、残念ながら多くの機会に恵まれなかった。歓迎会では中国側の出席者の方々と別のテーブルに座ることになり、北京外国語大学での交流も表面的な紹介に留まってしまった。そのため、一人ひとりの人に対する具体的な印象の変化は、今回の訪問では限定的なものに終わってしまったのが正直なところである。

2. 隣国・隣人として今後どのように中国（人）と付き合っていくべきか

今回の訪中を通して、中国という巨大な国を単一のイメージで語ることの危うさを痛感した。今後の日中関係を築いていく上では、互いの文化や考え方を深く理解する努力が不可欠であり、その第一歩は、個人レベルでの地道な交流にあると考える。

今回の訪問で十分な交流ができなかった反省を踏まえ、今後は大学に留学している中国人学生と積極的に関わりたいと思う。「中国に興味があり、行ったことがある」という事実は、相手に親近感を持ってもらうきっかけになると思う。彼らが日本に来た理由や、日本に対する認識を引き出しながら対話を重ね、相互理解を深めたい。

また、100人規模の団体行動で様々な難しさがあることは理解した上で、次回以降の訪中団に向けて少しでも使える部分があればと思い、運営の皆様への提案を記す。1点目に、交流時間の増加だ。歓迎会では中国からの出席者と学生を同じテーブルに配置し、自由に交流できる時間を増やしていただきたい。また展示説明の際は、15人×6グループのような少人数に分け、自由に質問をしながら見学できるようにしていただきたい。これによって、一方的な情報収集に終わらせず、双方向の対話を通じて相互理解を深めることができると考える。2点目に、随行員の方々の講演だ。どなたも中国に深く関わったご経験があると伺ったため、それぞれの専門分野や伝えたいテーマについて講演をしていただき、質疑応答の時間を設けることは、参加者の学びを深める上で非常に有効だと考える。夕食後のホテルでの自由時間を1時間充てるだけでも、大きな意味を持つはずだ。

3. この7日間が自分の人生にどのような影響があったか

中国の街並みやテクノロジーの発展を確かめ、多様な歴史認識を学ぶことができた経験は、私にとって大きな財産である。特に、今後さらに中国という国、そして人々と深く関わっていくことへの好奇心を与えてくれたことは、何物にも代えがたい。また、中国への興味を通じて出会い、仲良くなれた団員たちとの思い出も、かけがえがないものだ。

一方で、当初の目標である「現地の中国の方々や、中国に詳しい日本人随行員の方々との議論を通して、実践的な学びを深める」は半分ほどしか達成できなかった。私の努力不足に加え、天候によるスケジュールの大幅な変更や、100人規模の団体旅行のような案内方法が原因だと考えている。目標達成のために今後も継続的に中国に関わっていき、日中友好の架け橋となれるよう努めたい。

「視点を広げ、理解する」

2-B 中央大学 吉野有純

一つの国に、いくつの顔があるのだろうか。それは私が中国語を学び始めた頃を感じた最初の驚きだった。中国は単に隣国という距離の近さだけで語れる国ではなく、数千年に及ぶ歴史、500 以上の方言、56 の民族、そして急速に成長を遂げた都市文明と、それに伴い変化し続ける人々の価値観を併せ持つ、時間と空間の両軸において非常に奥深い国である。今回、大学生訪中国の一員として廊坊・北京を巡る機会を得て、その多面性を自分の目で確かめられる貴重な体験となった。教科書やニュースでは掴みきれなかった、人と人との対話や街の空気を通じて、生きている国としての中国が自分の肌に触れていくのは新鮮で、楽しい感覚だった。訪中も中盤に差し掛かった頃、ある班員のメンバーが「中国は想像以上に発展している」と話していたのが印象的だった。確かに、CVTE のような企業訪問では、AI 技術を活用した製品やシステムの精度と規模に圧倒された。また都市部では電子決済が隅々まで浸透していたことから、技術革新のスピードを肌で感じた。一方で、私が強く印象に残ったのは、郊外の住宅街で見かけた一面同じような高層マンションの風景だった。整然としているが生活感が乏しく、どこか無機質な印象を受け、「首都」としての北京のイメージとは違う静けさのようなものを感じた。この「静けさ」は、私の感受性が引き出した一側面にすぎないのかもしれない。そこで私は同じ場所を訪れていても、人によって受け取る印象が大きく異なることに気づかされた。発展や近代化に目を向けポジティブに捉える声がある一方で、私はその中にある人の気配や暮らしの温度感に意識が向いていた。自分が何に目を向けるかで、同じ景色も違って見えるという発見は、国を知る以上に、「自分は何を大切にしているのか」を浮かび上がらせてくれたように思う。私は以前から中国人の友人や知人と関わる機会が多く、その度に親切さや誠実さを感じていたこともあり、今回の訪中に対しても大きな偏見を持つことなく、期待と共に臨むことができた。そして実際に現地で出会った人々との交流の中でも、その印象は裏切られることはなかった。施設のスタッフやガイドとして案内してくれた方々が、忙しい中でも丁寧に対応してくれたこと、質問に対して真摯に答えてくれたことから、中国の人々のサービス精神や他者への向き合い方の真摯さを感じた。それは都市の規模や技術の進化と同じくらい、私にとって心に残る体験だった。今回の訪中プログラムには、異なる専攻や関心を持つ多くの学生が参加していた。中国への関心の強さもバラバラで、感じ方もそれぞれだったからこそ、会話や交流の中で多様な視点に触れることができた。旅行では得られない価値のある体験であった。私は、中国という国を「好きか」「嫌いか」という軸で判断することにあまり意味を感じていない。もちろん、国に対して強い親しみを抱く人もいれば、偏見や先入観から距離を感じている人もいる。しかし、そうした好き嫌いの感情はとても主観的なものであり、ときに物事を歪めて見せてしまうことがある。私が重視しているのは、歴史や文化、人々の価値観をまずは事実として受け入れること、そして理解しようとする姿勢だ。好きか嫌いかという評価よりも、相手を深く知

ることそのものに価値があると信じている。国という大きな単位であってもそれは同じだ。私は「他人を知ることは、自己理解につながる」という考え方を大切にしている。自分とは異なる価値観や文化に出会うことで、自分の中にある当たり前や、固定観念に気づかされることがある。そうした出会いの積み重ねが、自国への理解にもつながっていく。他国を知ること、自国をより深く理解することでもあり、やがて両国の相互理解、そして友好関係の土台になる。今回の訪中は、その理解することの大切さを、改めて実感させてくれる機会となった。今回の訪中を通して、私はこれまで以上に中国という国を深く知りたいという気持ちを抱くようになった。現地でしか得られない気づきや出会いは、私にとって非常に貴重な経験となった。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださり、多くの手配や準備にご尽力いただいた日中友好協会の皆様をはじめ、すべての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

「小さな光から生まれた「輪」——現地で感じたりアルな中国」

2号車B班 南山大学 米野楓奈

7月24日から30日までの約1週間、全国から集まった大学生100名と共に中国を訪れた。学部も出身地も異なる多様な仲間との出会いに胸を弾ませながらも、「訪中団」という言葉がもつ重みに少しの緊張もあった。

報道を通して語られる中国——急速な経済発展、日中間の摩擦、情報統制といった断片的なイメージは、知らず知らずのうちに私自身の中にも形成されていたと思う。だからこそ「リアルを自分の目で確かめたい」という想いが強かった。現地の空気に触れ、人々の言葉やまなざしから、できるだけ偏見を取り払い、ありのままを受け取ってみたい。そんな姿勢でこの訪中に臨んだ。

私は普段から旅を通じて、人とのふれあいや土地の「温度」を感じることに喜びを感じている。ただ観光地を巡るだけではなく、その土地に息づく暮らしや空気感に触れたいと考えている。今回の訪中でも、現地企業の視察や学生との交流、文化体験など、観光では得られない体験の中で、中国という国の息遣いをできるだけ多角的に記録し、将来的には自分の言葉で発信していきたいと思っていた。

今回の訪中団では現地企業、文化的施設の視察や北京外国語大学でのパフォーマンス披露、交流等盛りだくさんだった。訪問中には悪天候による旅程変更などもあったが、現地スタッフの柔軟な対応や温かいもてなしに助けられ、充実したプログラムを無事に終えることができた。

中でも特に心に残っているのは、北京大学で開催された「世界平和大会」での出来事だ。各国の大学生が集まり、平和に関する講演や文化パフォーマンスを通じて思いを共有するこのイベントの中で、私が体感したのは“予定調和”ではない、思いがけない形の「連帯」だった。

とあるパフォーマンスの後、一つのインドネシア人グループがペンライトを取り出し、小さな輪を作り始めた。それは最初、ただの「内輪ノリ」に見えた。しかし彼らの様子を見ていた日本人の私たちが自然と加わり、さらに周囲の他の国々の学生たちも次々に光を掲げていった。言葉や指示はなくとも、まるで波紋が広がるように、会場全体が一つの大きな光の輪に包まれていった。

私はその場面を、単に盛り上がりではなく、「共有する感情」が生み出す力として記憶している。国籍も言語も文化も異なる私たちが、呼吸を合わせ、互いの存在を受け入れ合ったあの瞬間。そこには、外交や報道の枠組みでは語れない、人と人との根源的なつながりがあった。

会場の一体感を生んだのは、ステージ上のパフォーマンスだけではなく、それを受け取る私たち観客の感性でもあった。J-popを披露した際には、現地の学生と一緒に口ずさむ姿も見られた。音楽という共通言語を通じて、文化の距離が一気に縮まったように思えた。

今回の訪中を通して、「隣国」という言葉の輪郭が、自分の中で少し変わった気がする。物理的には近いはずなのに、どこか遠く感じていた中国。けれど、実際に現地を訪れ、生活の一部を垣間見たり、人々の考えに触れたりする中で、ほんの少し距離が縮まったように思う。ニュースや SNS だけでは拾いきれない日常の表情が、そこには確かにあった。

私たちはこれから、どのように中国と向き合っていくべきなのだろうか。その問いに対して、今の私が持てる一つの答えは、「想像し続けること」だ。限られた情報だけで決めつけるのではなく、自分とは違う背景を持つ人の立場や考えを、できる限り想像してみる。完璧にわかり合うことは難しくても、その姿勢があるかどうかで、関係のかたちは大きく変わると思う。

この旅で得た学びは、決して一過性のものではない。私は今後も、この経験を自分の言葉で伝え続けていきたい。小さな光がつながり、やがて大きな輪になるように。私もその輪の一部として、隣国と向き合う未来を紡いでいきたいと、心から願っている。

日中友好のために考えたこと

2号車B班 日本外国語専門学校（スピコン団）千田実幸

まず、私は何度か中国に来ているので、あまり中国の印象は変わりませんでした。相変わらず、中国は建物、経済を回す力、人を動かす力など全ての規模が大きく、日本にいただけでは味わえない世界とのさまざまな違いを見せつけられました。また、私は特に中国の人に魅力を感じていて、いつもその自由奔放で、思いやりがありすぎるくらい優しい性格に心を打たれます。今回はあまり中国人との深い交流はなく、少し悲しかったですが、北京外国語大学に行った際には中国の学生と少し話ができて、中国人の魅力を再認識、また再発見できたので、嬉しかったです。

ですがそれは相手が親日だったからで、反日の中国人も一定数いることは確かです。今回は反日の方には出会いませんでした。毎回の訪中で、中国の街を歩いているとき、「こんにちは！」や「日本人ですか！？」と興奮気味に話しかけてくださる中国の方に出会うたび、本当に嬉しくなると同時に、これだけ親日の人が多い中で、なぜ理不尽に日本を嫌う人がいるのか、また、私の知らないだけで、どれだけいるのかという不安に駆られます。昔の日本に捉われず、今の日本を偏見なしで知ってもらうにはどうしたらいいのか。悩んでいましたが、今回の訪中で自分なりの答えが現在の時点ですが、明確になった気がします。

それは日日交流を通して気づきました。

今回の訪中の中で全国各地の大学生の方と深くお話しさせていただく機会がたくさんありました。中国に対するさまざまな意見や、気持ちの変化についてきいていく中で、実際に中国に来て、自分の目で見て感じることで、「本当の中国を知った気がする」、「ふわふわしていた中国のイメージがはっきりとした」、「中国っておもしろい」、「中国の発展を自分の目で見られてよかった」、「また来たい」というような声が多くありました。そこで、実際に中国をみて感じれば、みんなわかってくれるんだとわかりました。もちろんその中には、日本にいるときには反中だった学生もいます。ですがその学生たちが、訪中して感じたことを、日本に持ち帰って周りに広げれば、少しずつですが、中国に対する日本人のイメージを変えることができるのではないかと考えています。中国人も同じことで、日本に来たり、今回のように日本人と関わったりすることで、日本の本当の良さがわかり、周りに広げることで、親日の人を確実に増やすことができると考えることができました。また、学生の心は本当に純粋で、まだ社会や過去の歴史を深く知らないし、感じていないので、学生の段階から、お互いの国のイメージを変えていくべきだということも、はっきりと感じました。これが、偏見なしで互いの国のイメージを感じるための今の自分なりの答えだと思います。

だから私も互いの国の青少年に互いの国の良さを伝えられる職に就きたいと考えています。日中友好のために、少しでも力になれば嬉しいです。もっと言語や文化、歴史を学び、その夢に近づけるように努力します。

その夢に近づくためにも、今回中国共産党歴史博物館を訪れ、中国共産党の歴史を知ることができたことは、私にとって大きな学びとなりました。日本にいただけでは決して学べない、中国側が考えている日本や世界と関わった歴史を知ることができて、新しい発見や気づきが多く、非常に勉強になりました。

そして、夢が明確になったことも私の人生にとっての節目となりましたが、私は専門学生なので、普段関わることのない、全国各地の大学生たちと関わることができたことも本当に貴重な経験となりました。学生のほとんどが年上の方で、もちろん価値観や経験値が全く違うので、進路の相談にのってもらったり、物事の捉え方について話し合ったりして本当に勉強になったし多くの新しい発見をすることができました。生まれた地域や年が違うのはもちろん、育った環境や学力も違う相手と話し合った時間は素晴らしいもので、充実した日々交流ができたと感じています。

貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

「相互理解の大切さ」

2-B スピコン団 藤澤さゆり

大学時代大連に留学していた 2012 年は、日中関係が冷え切っており、連日報道される日本と中国のニュースは両国民の不安と怒りを煽るようなものばかりだった。中国各地では反日デモにより日系企業の店舗や工場が破壊された。私が留学した大連大学から市内へ向かうバスにはデモのスローガンが書かれた真っ赤なステッカーが貼られていたため、読んでいた日本語の本を閉じ、日本語を発することも慎んでひっそりと乗り込んでいたことを思い出す。しかしそのバスで耳にしたある中国人乗客の会話が今でも忘れられない。「今の時代中国と日本は切っても切り離せない。ましてや大連には日系企業が多いのだから、国同士は争っているが一般市民の我々同士は仲良くやっていくしかない」。これを聞いた私はそのバスでたった一人の日本人乗客だったが、思わず頷いた。幸いにも私は、身の危険を感じることなく留学期間を無事に過ごすことができたのだった。このような経験をしたことがあったため、今回の訪中前後で中国人に対する印象が大きく変化することはなかった。今回の訪中はあいにく豪雨の影響でキャンセルされた予定もあったが、私たちをスムーズにアテンドしてくださった方々のおかげで、この一週間たくさんの観光地やイベントを楽しむことができた。その中でも中国の最新技術と戦後 80 年という節目を迎えた平和を願うエピソードについて少し紹介したいと思う。

亦庄資源股份グループへの企業訪問ではデモンストレーションを交えた製品紹介に終始目を見張るものばかりだった。特に印象的だったのは中国の学校では既に導入されている教育用の大型スクリーンだ。指でタッチして操作できるスクリーンは世界地図や元素記号、立体的な図形を次々に表示させ、生徒が知りたい情報を瞬時に見せることができる。また生徒に支給される端末と同期して保存すれば、板書する必要もないという。これを聞いて、先生の話聞き漏らすことなく生徒の注意力を引きつけることも期待できると感じた。このような技術を導入すればたくさんの教科書を毎日背負って登下校しなければならない子どもたちの負担を減らせると思った。また、子どもたちの安全を守るため校舎内外の監視カメラの映像を管理棟のスクリーンに映し出し、生徒を特定することもできるという説明を受け、そこまで技術が進歩しているのかと驚いた。

世界青年平和大会では、130 余りの国から 3000 人近くの青年が私たちと同じように訪中国として招かれて参加していた。そこで中国人民対外友好協会の楊会長が 3 つのエピソードを交え、世界平和を願うスピーチをされた。そのうちの一つは中国軍が 2 人の日本人を救った話だった。日中戦争が激化する中、中国軍が日本人の姉妹を救い出したが妹の方は生後 7 カ月の赤ん坊だったため、その知らせを受けた指揮官は乳母になってくれる中国人女性を探し出してその赤ん坊を預け授乳をさせた。4 歳の姉には軍用の食料を分け与えたのち、この姉妹を無事に日本に返してあげてほしいと農民に託した。その農民は何日間も子どもたちの世話をしたが途中で身の危険を感じ、日本軍に引き渡した。彼女たちを発見

し、救い出した将軍の回想録には戦火があちこちに広がり世の中は混乱していて、あの子どもたちが無事日本に帰国し生き延びているのか、今でも心配だと記されていた。それから40年の月日経ち、その指揮官は当時4歳の少女であった日本人女性と再会することができた。女性は日中友好の特別な使者として何度も中国へ訪れ、その後彼女の故郷である宮崎県都城市と彼女を救った指揮官の故郷である重慶市江津区が友好都市関係を結ぶこととなったという。この話を聞いて、戦争がなくなり平和を保ち続けられる世界にしなければならないと強く思った。

私は日本の幼稚園、小中学校に通う中国人の子どもたちへ日本語指導等のサポートをしているが、外国人を受け入れる日本の教育現場は様々な問題を抱えている。その問題は相互理解の欠如から生まれることが多いと感じる。今回改めて、私自身が中国をもっと理解する努力が必要だと痛感した一方で、来日する中国人にも同様の努力が必要であると感じた。そのためには今回のような日中双方が交流できる場を増やすことも解決策に繋がると思う。今後も彼らとのコミュニケーションを大事にして、子ども達が日本で安心して暮らせるよう努めたい。